

びわこの考湖学

20

人が集まるところに、ものが行き交います。ものが行き交うところには、お金が集まります。中世の坂本はそのような状況にありました。古代以来、琵琶湖を中心として南の京と北国との間でさまざまな生活物資や食物が行き交っていました。その中間地点に位置しているのが坂本です。中世の陸路では京を繋ぐ今路越を荷物満載した馬や荷車が多数行き交い、湖上では対岸の朝妻(現米原市)ルート、武佐(現近江八幡市)ルート、北へ向かう今津ルート、船に荷を満載させて帆をいっぱい張った多数の船が行き交っていました。坂本は水陸交通の要でした。

行き交う荷物は、坂本の三津浜の港で荷揚げされ、問丸という問屋が荷物の取引を行っていました。物資の流通

中世の坂本

は、町の繁栄を呼びます。港から門前にかけてには、荷物を管理するたくさん建物が立ち並び、たいそうな賑わいを見せていたようです。

もともとは坂本は比叡山延暦寺の門前町として栄えていたのですが、中世にあっては港町としても機能してました。荷揚げされた荷物はふたたび船に積み込まれて新たな地に向けて湖上を運ばれるものもあります。ここから陸路を利用される場合もありました。

それら陸路の輸送を担っていたのが、馬借とか車借と呼ばれていた人々です。彼らは鎌倉時代末期に発達した運送

流通の要運送、金融業が発達



●は馬借の居住地

業者のことです。今で言えば高速道路を行き交うトラック輸送にあたるでしょうか。彼らは普段は農業を生業としていますが、農閑期など必要に応じてこの仕事に従事していたという事です。当初、彼らは延暦寺の支配下にありましたが、その勢力が大きくなるにしたがい自らの主

張を力で示そうと蜂起し、借金を棒引きにしようとする。借金を棒引きにしようとするための徳政令を求めて大規模な一揆を起したことは有名です。このように、人と物が行き交うところには、お金が集まります。延暦寺は、これらの流通経済に目を付け、湖上に関を設けて通行税を取ることを

を思いついています。以後、この税は延暦寺の重要な財源となっていく。ちなみに、坂本(武佐)の船賃が22文に対し、関銭は140文であったといわれています。いつの時代も、商いにはお金がかなり大変だったようです。

そういうこともあり、港では日吉神社の神人や延暦寺の山僧が、白壁の大きな倉を構え、その中で商売などに必要なお金を貸す金融業を始めています。これが、土倉(どそう)とよばれるものです。当時、港には本倉30軒、新倉9軒の計39軒もの土倉が軒を連ねていたことその繁盛が知られています。このように、

中世の坂本の繁栄は、延暦寺の存在を背景に、流通経済そのものに支えられていたといえるでしょう。

(滋賀県文化財保護協会)

木戸雅寿